

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13362

研究課題名（和文）アッシリア王碑文におけるプロパガンダ

研究課題名（英文）Propaganda in the Assyrian Royal Inscriptions

研究代表者

佐野 克司（Sano, Katsuji）

筑波大学・人文社会系・研究員

研究者番号：00836067

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：アッシリア王碑文は、王室イデオロギーに基づいて作成されたため、記録の中から歴史的事実に近いと考えられるデータを引き出すためには、王碑文を作成した書記がアッシリア王を「強い王」として表象した技術全般を解明する必要がある。これを目的とした調査を行った結果、アッシリアが他国に譲歩した外交や戦闘における敗北などのネガティブな出来事が事実の「書き換え」や「黙殺」によって隠蔽されていたことが明らかになった。また、文学作品の技法を使用して王を叙事詩に登場する英雄のように表象していたことや、王の軍事的な功績が数の操作などによって誇張されていたことが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アッシリア王碑文を歴史史料として使用するために必要となる知識をアッシリア学内外の研究者に提供できることに研究成果の学術的意義がある。誇張ないし歪曲されたアッシリア王の功績が多数の研究者に歴史的事実として受け入れられている状況にあって、研究代表者が行った調査はアッシリア史の修正に大きく貢献し得る。また、本研究課題の研究成果は、近年関心を集めているアッシリアの文化遺産に対する深い知見を提供できる点において社会的意義を有している。

研究成果の概要（英文）：Since the Assyrian royal inscriptions were created based on royal ideology, it is necessary to elucidate all the techniques by which the scribes who created the royal inscriptions represented the Assyrian king as a “strong king,” in order to extract data from them that is considered close to historical facts. Research conducted to this aim has revealed that negative events, such as the diplomatic concessions made by Assyria to other lands and defeats in battle, had been covered up by “rewriting” or “ignoring” the facts. It has also been found that the king had been represented in the royal inscriptions akin to a hero of the epic by using literary techniques and that the king’s military achievements had been exaggerated through techniques such as manipulation of numbers.

研究分野：アッシリア学

キーワード：アッシリア王碑文 アッシリア学

1. 研究開始当初の背景

約 150 年に渡るアッシリア史研究において、アッシリア学の研究者がもっとも大きな関心を寄せてきたテーマが「王権」である。「王権」とは、人民に対する王の権力ないし統治権を意味し、「権威 (authority)」と「力 (power)」の側面から構成されている。現在に至るまで、「権威」の側面に焦点を当てた研究が重点的に行われてきたため、「力」の側面に関しては十分な研究がなされているとは言い難い状況にあった。

2. 研究の目的

古代アッシリアの王が後世に残した「王碑文」は正確な歴史記録ではなく、地上における神アッシュルの代理人であった王の業績録である。王碑文を作成した書記は王の功績を美辞麗句で飾り立て、不都合な事実を覆い隠した。先行研究によって、書記が「強い王」を表象するために使用した技術の一部は明らかになっているが、未だ体系的な研究が提出されていないため、研究者の間でも批判なく受け入れられている王の誇張された功績も多数存在している。本研究の目的は、アッシリア王碑文の中から歴史的事実に近いと考えられるデータを引き出すために、書記が「強い王」を表象するために用いた技術全般を明らかにすることにある。

3. 研究の方法

王のすべての功績が王碑文において誇張されて記録されているわけではなく、極めて簡素な表現で伝えられているものも存在する。それゆえ、同じ出来事に言及している複数の王碑文の記事を比較することによって、歴史的事実を反映している蓋然性の高い出来事がどのように装飾されているかを知ることができる。また、王碑文の記事の内容を実務的な王室書簡やアッシリア以外に由来する史料 (同時代史料ないし後代の史料) と比較考察することによって、その事実性を検証することができる。

4. 研究成果

(1) 王室書簡を基にアッシリアが諸外国に行った外交に関する出来事を再構成し、それらの外交が王碑文においてどのように記録されたのかを調査した。その結果、アッシリア王が他国に対して譲歩したと見なされ得る外交は、「強い王」の表象にとってネガティブに作用するため、事実の「書き換え」や「黙殺」によって隠蔽されていたことが明らかになった。

(2) 王の軍事的業績がどのように誇張されているのかを調査した。同一の出来事に言及している複数の王碑文の記事を比較分析した結果、特定の王碑文においてアッシリア王によって征服された国々がまとめて言及される場合、王がある国で成し遂げたもっとも大きな業績によって要約されていることが判明した。また、属国から労働力として提供された人々に関しても、彼らが実際に強制移住の対象となった人々と一緒に言及される場合、「捕囚民」という語で括られていることが明らかになった。

(3) アッシリア王碑文は、アッシリア王が征服した国々から連れ去った捕囚民や奪った略奪品について詳細に記録している。多くの場合、それらには数 (人数、数量) が記載されている。先行研究は、数が記載されたもののみを調査対象としてきたが、研究代表者は特に数が記載されていない事例に注目し、関連するデータを収集してその理由を考察した。調査の結果、数が記載されていない場合、征服の対象となった国や都市の規模が小さく、想定される捕囚民や略奪品の数も少数であることが判明した。

(4) 書記が「バビロニア創世叙事詩エヌマ・エリシュ」や「ギルガメシュ叙事詩」に見いだされる表現を特定の王碑文 (サルゴン 2 世の「神への手紙」、センナケリブの「シカゴ・プリズム」) の中で使用することによって、アッシリア王を強く英雄的な人物として表象したことが先行研究によって明らかにされている。研究代表者は先行研究とは異なる視点から、書記が文学作品のどのような技法を用いて「強い王」を表象したのかを調査した。調査の結果、詩的表現の *ša* が文学作品の要素が強いサルゴン 2 世の「神への手紙」のみならず、その他の王碑文にも使用されていることが明らかになった。加えて、この詩的な表現が確認されるのはサルゴン 2 世の治世からであることも判明した。現在、もっとも信頼のおけるアッシリア王碑文の史料集である RINAP (The Royal Inscriptions of the Neo-Assyrian Period) においては、この詩的表現が正確に翻訳されていないため、研究代表者の発見と既存の翻訳に対する指摘は王碑文研究に貢献し得る。アッシリア王碑文は原則として王の「一人称」で書かれているが、ごくまれに部分的に「三人称」で書かれた箇所も確認される。先行研究においては、なぜ主語が突然「三人称」に切り替わった文が現れるのかについて明らかにされていなかった。史料集においては、書記の間違いであると指摘されて修正されている箇所も散見されるが、研究代表者が関連するすべての表現を前後の

文脈とともに考察した結果、書記が意図的に「一人称」と「三人称」を使い分けていることが判明した。つまり、書記は「三人称」で書かれた文をナレーションとして挿入することによって王の行為に客観性を与えたと考えられる。

歴代のアッシリア王は、神アッシュルを頂点とする世界を拡大するために軍事遠征を行ったが、敵のもとに到達するためにはしばしば過酷な自然環境（山、川、海、砂漠）を乗り越えなければならなかった。アッシリア王碑文においては特に険しい山の克服が「強い王」の表象にとって必要不可欠な要素として描かれている。王碑文においては実際の地理的な状況が誇張して描写されていると想定されるため、王が乗り越えたと主張している困難な自然環境の描写を集め、現実の自然環境との乖離を調査した。明らかにすることができたのは一部の山のみであるが、王碑文が物語風に作成されていることを確認できた。

（５）軍事遠征の記事の中には、アッシリア王が「敵の兵士や住民を殺害した」という簡素な表現だけではなく、敵の兵士、住民、エリートに対して行った残酷な行為の描写も数多く含まれている。王碑文における残酷な描写はアッシリアのイメージと不可分に結びついており、研究者でさえアッシリアの残酷さに疑問を呈することはほとんどない。確かにアッシリアが領土拡大を目的とする軍事遠征の過程において、記録に残されているような残酷な行為を行ったことは間違いないように思われる。しかしながら、王碑文に記録されている残酷な行為のすべてが歴史的事実を反映しているわけではなく、アッシリア王に対する反乱や敵対的な行為を防ぐために王の残酷さを過度に誇張している記事も少なからず確認される。研究代表者はテキストの解釈に基づいて実際には行っていないと考えられる事例を収集することによって、現代においては自国が行った残虐な行為は隠蔽ないし正当化するが、古代アッシリアにおいてはその逆であった事実を明らかにした。

（６）書記たちは、動物を用いたメタファー（暗喩）とシミリー（直喩）を使用することによって、「王の強さ」の表象を試みた。アッシリア王碑文における動物を例えにした表現は、先行研究によって網羅的に集められており、中アッシリア時代のシャルマネセル1世から新アッシリア時代のアッシュルバニパルまで使用されたことが確認されている。先行研究によって収集されたデータは有益な情報を与えてくれるが、当該の研究においては、このような表現を「強い王」の表象との関連において議論しているわけではないため、プロパガンダ技術の一つである「ネームコーリング」を軸とした調査が必要となる。研究代表者がこれらの表現を考察したところ、書記が王碑文の読者ないし聞き手に「強く勇敢なアッシリア王」というイメージと「臆病で弱い敵国の王」というイメージを連想させるために、強い動物（ライオン、雄牛など）とそのポジティブな特徴をアッシリア王に、弱い動物（狐、マンガース、豚など）とそのネガティブな特徴を敵国の王に結び付けていることが分かった。

（７）アッシリアに敵対的な外国の支配者および一度は服従したものの、その後反旗を翻した外国の支配者は、「絶対的な悪」として表象された。敵側の支配者に張られた一般的なレッテルは「裏切者」「人殺し」「悪魔」「不服従な者」「邪悪な敵」であったが、「文明人」に対する「野蛮人」という意味合いで「山の住人」という用語が使用されることもあった。王碑文においては、「強いアッシリア王」と対をなす存在として敵側の支配者を「弱い王」と表象している。敵側の支配者の行為に関する表現をすべて収集して考察した結果、アッシリアに敗北したのち、自国の軍隊を残して一人で逃亡する場面が頻りに描かれていることが確認された。王碑文以外の史料に基づいて当該の出来事を検証した結果、完全に事実を捻じ曲げて記録している事例を複数確認することができた。

（８）アッシリア王碑文のオーディエンスに一般住民も含まれるのか」という問題に関しては、そのことを直接的に示す証拠が存在しないため、「アッシリアのエリートや外国からの使者にのみ読み聞かせられた」とする説が支配的であった。しかしながら、研究代表者が、これまで先行研究において注目されてこなかった、帝国の中心的な諸都市においてアッシリア王が自らの力を誇示するために行ったと考えられる政治的なパフォーマンスに関する事例を網羅的に収集して分析した結果、王碑文の内容は広く一般の住民にも定期的に伝えられていた蓋然性が高いことが明らかになった。

（９）2019年度から2021年度までに行った研究の成果を2022年6月に開催されたシュメール研究会で発表した。過去4年に渡る研究成果は英語で著した単行本として数年以内にドイツの出版社（Zaphonを予定）から刊行することを計画している。本研究課題は「アッシリア王碑文におけるプロパガンダ」であるが、本のタイトルは「歴史史料としてのアッシリア王碑文」に変更する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Katsuji Sano	4. 巻 57
2. 論文標題 Review of Shigeo Yamada (ed.), Neo-Assyrian Sources in Context: Thematic Studies of Texts, History, and Culture (SAAS 28), xvii+267 pp., Helsinki: The Neo-Assyrian Text Corpus Project, 2018	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Orient: Journal of the Society for Near Eastern Studies in Japan	6. 最初と最後の頁 173-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐野克司	4. 巻 3
2. 論文標題 アダド・ニラリ2 世による都市Nasibina の征服	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際的研究	6. 最初と最後の頁 95-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Sano Katsuji	4. 巻 30
2. 論文標題 The Role of Women in Assyrian Foreign Policy	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Studies in Ancient Near Eastern Records	6. 最初と最後の頁 45～62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/9781501514821-004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐野克司	4. 巻 5
2. 論文標題 前9世紀におけるアッシリアの理念的併合について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際的研究	6. 最初と最後の頁 85-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐野克司
2. 発表標題 アッシリアにおけるエリート外国人の宮廷教育
3. 学会等名 日本オリエント学会第63回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐野克司
2. 発表標題 新アッシリア帝国における捕囚民の統合と民族的アイデンティティ
3. 学会等名 新学術領域研究「都市文明の本質」A02- 計画研究 02 18回研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Katsuji Sano	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Ugarit-Verlag	5. 総ページ数 468
3. 書名 Die Deportationspraxis in neuassyrischer Zeit	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------